

書評02

中嶋 洋平 著

『社会主義前夜
—サン＝シモン、オーウェン、フーリエ』筑摩書房 / 2022年10月刊 / 272ページ / 880円＋税
ISBN 978-4-480-07510-9評者：杉本 貴志
関西大学商学部 教授

もう40年以上前になるだろうか。学術研究の世界と、学生運動や労働運動など社会運動の世界において、マルクス主義が圧倒的な影響力を保持していた時代、そうした世界に足を踏み入れた人々がまず手に取って学んだ本は、『共産党宣言』と『空想から科学へ』だった。いつかは『資本論』を読み通すぞと意気込む若者にとって、内容がコンパクトにまとめられて厚さが薄いこの2冊は、格好のマルクス主義入門書となる。そして、そのなかに登場するオウエンやサン＝シモンやフーリエを、あるいはシモンディやプルードンや真正社会主義者たちを、“いかにマルクスに及ばない存在であるか”語ってみせることが、一人前の証のように扱われる時代があったのである。

したがって“科学的”ではない“空想的”な資本主義・競争社会批判を展開したとされたオウエンらの名は、三大ユートピア社会主義者として広く知られることとなったけれども、それはあくまでマルクス主義前史としての扱いであり、マルクス主義の運動的な退潮とともに、専門的な研究論文以外でユートピア社会主義者が取り上げられることは稀となってしまった。鹿島茂『パリ万国博覧会 サン＝シモンの鉄の夢』（新版、講談社学術文庫、2022年）は、サン＝シモン主義に関する優れた入門書としても評価できるが、そうした少数の例外を除けば、初学者が初期社会主義者といわれる人々を学ぶための入門書、啓蒙書を新刊書の中に見つけること

は非常に困難である。いまや『空想から科学へ』といっても、マルクス主義の文献とは想像できない学生や若者が大半であろう。

本書は、そうしたマルクス退潮の時代を過ごしてきたであろう1980年生まれという著者が、『空想から科学へ』に取り上げられた19世紀初期の3人の思想家の主張と行動を「社会主義前夜」として描く啓蒙・入門書である。著者の専門は政治思想、その中でも特にサン＝シモン主義であるから、サン＝シモンやフーリエ、そしてその背景となるフランスの社会事情についての記述はお手の物であろうが、あえてそこに産業革命をいち早く成し遂げたイギリスのオウエンを加えて三者をまとめて論じるという「厄介」な仕事を、著者は成し遂げている。

本書は次の構成から成る。

はじめに

- 第1章 市民革命と産業革命
 - － 社会をめぐる動揺と混乱
- 第2章 ナポレオンのヨーロッパ
 - － 社会の安定を目指して
- 第3章 ウィーン体制としばしの安定
 - － 社会の理想を求めて
- 第4章 成長する資本主義の下で
 - － 出現した社会の問い直し

あとがき

主要参考文献

年表

第 1 章では、政治や経済における画期的な進歩とみなされる市民革命と産業革命が、実は「人を人として尊重せずもののように扱っている」という側面を擁していたことが、3 人の主張と行動が生まれた背景として説明される。

つづく第 2 章では、自然界における万有引力のように、社会にもそれを成立させ、人間関係を安定化させるものがあるとするサン＝シモンの主張、フーリエの情念引力、オウエンの性格形成論と、それにもとづく彼らの社会観が描かれる。

また第 3 章では、3 人が産業の発展と資本主義経済をいかにとらえていたかが、既存体制を正当化する既成宗教への批判とともに紹介される。

そして第 4 章で、労働協同体という理想の実現を目指したオウエンと、多様性を持った人間が共生するファランジュを構想したフーリエ、そして新しいキリスト教の下での資本家と労働者の融合を考えたサン＝シモンが、社会という存在を思想と行動の中心に据え、その安定の実現を目指し続けた「社会起業家」「社会プランナー」のような存在であったといえるのではないかとまとめられる。

著者自身があとがきで述べているように、膨大な著作と波乱万丈の経験をもつ 3 名を新書判 1 冊にまとめるにあたっては、取り上げるべき事柄の取舍選択にあたって大変な苦労があったことが想像される。〇〇についての記述がない、といった評価を安易に下すことは、ないものねだりのそしりを免れないであろう。それでもやはりイギリスを中心に学んでいる評者からすれば、章のタイトルが示しているように、フランスを中心としたコンテクストのなかにロバート・オウエンを無理やりはめ込んだという感がなくもなく、本書でオウエンを知ったという読者には、次のステップに進んで学ぶことが求め

られるだろう。しかしそれは、本書が入門・啓蒙書として十分優れた内容を持っていることを些かも否定するものではない。

そうしたことを理解したうえで、それでもあえて英・仏というコンテクストの問題に言及したのは、この『くらしと協同』誌の読者の多くが生協など協同組合の研究者や関係者であることを意識してのことである。残念ながら本書からは、なぜ英国人オウエンが世界中で「協同組合の精神的父」といわれるのか、その考えを受け継いだオウエン派の人々がいかにしてイギリスにおいて協同組合運動をつくりあげ、それが国境を越えて今日 10 億人を超える人々を組織するようになったのか、読み取ることは困難である。

本書には協同組合が全く登場しないというわけではなく、「労働協同村の構想においても、労働者を中心とした人びとの連帯と協同のために労働組合を結成するという構想においても、オウエンが重視するものは協同組合であった」という記述もある (p. 219) が、正直いって、ここで著者がいう「協同組合」とはどういうものなのか、評者には理解できなかった。

ことほどさように、現代の協同組合と 19 世紀のユートピア社会主義との結びつきは複雑で容易には把握できないものであるが、そこにはたしかに、か細く、絡み合った“線”が通っている。それを理解することが、協同組合がもう一度、草創期のように競争社会・格差社会に対抗する基軸として再生するためには必要であろう。

本書を手にとった協同組合関係者が、なぜこうした 19 世紀の“空想的”な“社会主義”の思想が 21 世紀の協同組合に結びつくのか、次なる思索と探求に進むことを期待したい。